

書評

D.メイナード

樫田美雄・岡田光弘【訳】

国際医療福祉大学

『医療現場の会話分析』を教科書として利用して

阿部智恵子¹⁾

—学生の感想を中心に—

I. はじめに

現在、医療現場における会話分析が多く研究されている。これは、医療現場におけるコミュニケーションの困難さ・複雑さを如実に表しているといえるだろう。

私は、今まで、多くのコミュニケーションテキストが、患者とどのようにコミュニケーションをとるかだけのツールを教えるにとどまっているのではないかと感じていた。医療の現場における現象をくみ取り、どのような事が現場で行われているのかという現象をみる視点というのは少なかったのではないだろうか。

医療場面におけるコミュニケーションの必要性を感じていたときに、まさにタイムリに樫田美雄・岡田光弘訳『医療現場の会話分析』が翻訳された。訳者あとがきによると、この本は、医療・看護学の対人コミュニケーションに関わる人を対象にしている。医療を学ぶ学部生にとって、医療現場におけるコミュニケーションは大切である。

それであれば、次年度から、看護師として働く学部生にも、うってつけの本であると感じた。どちらかという、就職する前にこそ、こういう本は必要ではないかと考えたからである。そこで、『在宅看護論』の中の授業の中に組み込む形で活用を行った。

訳本を授業に導入したきっかけは、上記のようなことであった。

ご覧のように、訳書は、社会学の視点の構成よりなる。社会学を履修している者もしていない者もいる中で、社会学よりもっと難解な会話分析をどのくらい理解できるだろうかという心配が少なからずあったことも事実である。しかし、この本は、大きく分けて、前半は「理論」、後半は「事例への応用と展開」に分かれている。これは、どの切り口からも、読んでいいということである。学生が興味を示すような事例を中心に展開する事も可能である。訳書のこのような応用自在性も利用者としては、使い勝手がよくありがたい。学生の頭に、新しい視点が加わること、自分の頭で考えていくことを期待しつつ、授業に使用した。

実際に授業に使用したことで、導入前には、教師も気づかない意義や課題がわかってきた。本稿は、授業後にとった学生のアンケートを元に、学部学生に『医療現場の会話分析』を使用して、若干の考察を得たので、ここに発表する。ここでの報告は、科研夏合宿での発表を元にしてしている。

II. 研究方法及び対象者

「在宅看護論」(選択)の授業の一コマ(90分)

受講者 看護学科4年生116名

授業を受講する前に、エピローグを読んでもらうように事前にアナウンスしておいた。

III. 授業の形態について

〈訳者榎田美雄による授業〉

その時に配布されたレジュメは、以下の通りである。

地域看護（在宅看護）と会話分析（K大学）

【『医療現場の会話分析』と地域看護： 現代社会論としての医療・知識・組織社会学】

榎田美雄（かしだ よしお）

(kashida@ias.tokushima-u.ac.jp)

【基礎データ】

□=教科書=

D.メイナード著、榎田美雄・岡田光弘訳、2004『医療現場の会話分析』勁草書房。

□=領域と狙い=

- ・地域看護の課題を現代社会理解に基づいて検討する
- ・文脈の中で、会話の意味が定まることを理解する

【授業の流れ】

I。現代社会と看護師

- (1) 近代社会は、分業化社会、専門化社会である。(身分・属性主義→業績主義)
- (2) 現代は、高度情報化社会でもある。
- (3) したがって、専門職は、学び続けなければならない。(生涯学習社会)
- (4) 素人（非専門化）も、たくさんの情報を持っている中で、そういう状況を踏まえて医療者は患者に接しなければならない。
- (5) 看護者には、患者支援の役割が与えられつつある。

II。医療現場の会話分析について

- (1) 「告知」にはするか、しないか、という問題だけではなく、どのようにするかという問題もあることを理解してもらう。
参考:背景としての現象学、生活世界論
- (2) ニュース（「知らせ」）の意味が、文脈で変わること理解してもらう（4章）
- (3) 文脈には、社会常識と、場面の特徴が影響していることを理解してもらう
- (4) PDS（パースペクティブ・ディスプレイ・シークエンス）の考え方を理解してもらう

III。まとめ

- (1) 自立強迫社会において、患者は、インフォームド・コンセントを強いられている。

(2) この負担をなるべく軽くする、援助提供者として看護師は働きうる。

IV. 学生の感想から

事前にエピローグを読んでみての感想をいくつかあげてみると、

1. 聞き慣れない語句が多いのでわからなかった。
2. 内容が理解できなかった
3. この訳者は、専門書なだけにとっても、難しかった。
4. 内容が興味深いものであったが、表記、表題の仕方が難しく理解するために何度も読み返さなければならなかった。

授業を受けた後の感想の主なものをあげてみると、

1. 本の内容については、医療従事者をめざす人としても、生活をしてゆく中での一人としても、とても、重要な事であった。
2. 現象学としての社会的分析の視点に立って、看護をとらえると、おもしろいと思った。
3. 専門職の人が見につけている”ふるまい”について、とても、興味深い授業でした
4. 社会学は、看護を勉強するのに必要な学問だと知った。
5. ニュースを話す前に、受け取り手が何を知っていて何を確信しているのか、受け取り手の信念や知識に関連づけてニュースを伝える、PDSの考え方を始めて知りましたが、ニュースを送り届ける中での大切な過程であると思いました。

特に興味をひいたり、印象的であったものとしては、次のことがあげられる。

1. 印象的だったのは、「悪いニュースを伝える側は、相手にそのニュースがきちんと伝わったかどうかを確認する義務がある」ということである。たとえばがん告知など、医療従事者には、そういった機会が多い。そのような場面に遭遇したときには、看護師もその義務を果たさなければならない。患者さんに、話がきちんと理解出来たかどうかを確認することは、義務であるのだということを確認できた。
2. 最も興味深かったことは、「ニュースの位置価が文脈による」ということで、日常生活においての会話が分析されることによって、必要時、必要な方法でニュースを伝えることが可能となる。ニュースは良くも悪くも受取人に衝撃を与えるものであるため、ニュースを伝える者は文脈を考え最も適切な方法で伝える必要があると理解した。
3. 会話について、打診－応諾が了解に対して打診－躊躇は、拒否を示すものというのが面白かった。また、ニュースの良い悪いは受け取り手と話し手で違うということを知った。話し手はニュースを伝える環境など考える義務があることを知った。

V. 学部生に教科書として使う意義をあげてみると以下の様になる。

- 1 看護学と社会学のつながりが理解できる
看護学を社会学の視点で見ることによって、それまで、取りこぼされてきた事柄をすくい取ることが出来る。
- 2 今までの病院実習の体験を振り返り理解できる。

今まで、実習で体験した医療現場での会話の意味をあらためて振り返ることによって、理解することができた。説明の場面、告知の場面等を思い出し、もう一度反芻することで、場面、場面の会話のもつ意味を理解できた。

- 3 自分の日常生活での会話の振り返りが出来た。
友人や家族、自分を取り巻く周囲の人たちとの会話を振り返る事が出来、今後よいコミュニケーションをたもつためには、どうしたらいいかなどを考えることが出来た。
- 4 理論があまり理解できていなくても、事例を読むことでおぼろげながら意味を理解することが出来る。これは、訳本が「理論」と「事例を通しての展開」の二部構成になっていることによる利点であろう。

VI. 学部生に教科書として使う時の課題

1. 語句が難解である

学生の感想に、「看護用語はわかるが、ふだん、聞き慣れない語句が多く理解できなかった」という感想があった。学生は、語句が理解できないだけで、居心地の悪さを感じており、アレルギーをおこしていると感じられた。

2. 教科書の例が難解である。

わかりやすい事例もあったが、多くの会話は、学生が理解するには、難解な例が多かった。この訳本は、事例の豊富さも売りにしているので、学生にもっと引きつけた事例を使用することも可能ではないかと考える。

3. 導入としての社会学の前講義も必要か

社会学の素養の有無について、理解度が違ってくると思われる。
社会学を理解するきっかけが欲しい。

4 「この本がマニュアルとして利用される恐れがある。」という危惧がある。

「授業後、スモールグループディスカッションをしてそこから、もう一步、自分の頭で考えていくという時間、ステージが一つあるとよいのではないか（大意）」という相野田²⁾の意見は、私ももっともだと思う。

学生の感想の中に、「社会学な視点から物事を考える事を知りました。自分の頭は固いなあ、自分は言葉不足だなあと感じる機会がもてた」と記載されていた。これは、とりもなおさず、一方では看護学生が、入学後、4年という最終学年を迎えて順調に専門家としての道を歩んでいるという証拠でもある。「マニュアル化」されてしまうことの怖さを感じるという相野田の意見には、私も納得する。最近の若者はマニュアルがあることで非常に安心感を得る。看護学生もそれに違わない。一つのツールを見つけることによってパターン化され、自分の頭で考えなくなるのではないかというのがここでの相野田の心配である。

相野田は、「この本が、学生によって、マニュアル化されるのではないか」という危

惧の後、次のような提案をするに至っている。「スモールグループディスカッション」を授業後取り入れることによって、自分の頭で考えられるようになるのではないかと提案した。しかし、これには、時間が必要である。このディスカッションの時間をどのように、授業に組み込んでいくかは、今後の課題である。

VII. 考察

これまで、学生の感想をとりまぜながら、考えてきた。社会学の素養のない学生が多く、「エピソード」でさえも、よく理解できず、理解困難であったということがわかった。しかし、授業の中で訳者が社会学について、触れ、会話分析へと進む事によって、水を得た魚のように、多くの事を把握することが出来たのである。社会学を知らなかった事により、あらためて新鮮な刺激を受けたようであった。

会話についても、非常に強い関心を持ち、自分の日常や実習場所での会話を振り返ることげできた。そのことにより、会話分析がより、身近となり現実味をもって学生の前に立ち現れたのである。

VIII. まとめ

今回、タイムリーに訳書を授業に取り込む事によって、ほとんどの学生が「興味深かった」「新鮮であった」「自分たちの将来に役に立つ」「今後役に立てたい」「コミュニケーションスキルをあげたい」という前向きな言葉が聞かれた。

学生の興味を引きだし、今後も本を続けて読んでいきたいという言葉も聞かれた。

これは、授業の中で、訳者が学生の社会学への理解を促しながら、上手に会話分析へと導いた結果であろう。

授業に使う時には、この訳本は必ずしも使いやすいとは、言えないかもしれない。それをどのように、使いやすくするかということのを代案を考えながら、述べていこう。

1. 丁寧な解説

学生を読者と想定するならば、今以上のやさしい、丁寧な解説を付け加えるほうがいいのではないだろうか。少しのきっかけで、学生の理解度は、一段と進むことがわかったので、それを期待するためにも、丁寧な解説をのぞみたい。

2. 可能であれば、訳者による講義が非常に良いと思われる。

これが、無理であれば、訓練された教員による講義が必要となるであろう。しかし、残念ながら、社会学の素養のある教員が少ないのも事実である。訓練されていない教員による中途半端な解説は学生をよけいに混乱させられると思われる。

願わくば、誰が教えても、一定の水準が保たれるような、教える側にも配慮した解説があればと思う。

3 アフターフォローの必要性について

「スモールグループディスカッション」のような自分の頭で考えるという体験が必要である。これは、自分の考えを再び振り返ることが出来るようにという点で大切であ

ろう。他の人の意見を聞くことによって、触発される場面も多くなってくるだろう。このときの教員の役割は、グループを見守り、自分の考えを押しつけることなくあくまでもみまもるという気持ちが大切であろう。

4. 社会学の授業

この本を理解するには、社会学の素養が不可欠である。社会学を理解することによって、もう一步、踏み込んだ会話分析という魅力のある世界への関心を深めることが出来るのではないかと考える。

以上、考えつく限りの代案を考えてみた。

はじめにでも述べたが、医療現場での会話分析については、現在多くの研究者によって、研究がなされている。そのような背景には、医療現場のコミュニケーションが、より複雑になっていっているという背景もある。私のように、学生の内から、医療現場の会話分析を学ばせたいという教員も多くなってくるに違いない。そのような事を鑑みると、これからも、ますます 授業で訳本が使われることも多くなってくるのではないかと感じる。

看護の現場という大海原に舟を漕ぎ出す学生に、この訳書は限りない思考の地平を拓いてくれる良書である。

注

- 1) 阿部智恵子のメールアドレスは、abe.chieko@iuhw.ac.jp である。
- 2) 相野田紀子の所属は、金沢医科大学である。

IX. 参考文献

- 檜田 美雄・寺嶋 吉保 2003 「インフォームド・コンセントに家族はどのように関わっているか」『社会学年誌』44号 33-55
- 山崎 敬一・西阪 仰 (編) 1997 『語る身体・見る身体〈附論〉ビデオデータの分析法』、ハーベスト社
- 好井 裕明・山田 富秋・西阪 仰 (編) 1999 『会話分析への招待』、世界思想社